

芳賀 綏氏の「日本文法教室」を読む

長 田 久 男

改め、あるいは、新しく開拓した部分が多い。

そこで、この書評では、その後者を対象として、紹介と意見を述べる。そのため、後者、すなわち、著者自身の考えによつて改め、あるいは新しく開拓した部分を本書の論述の順序に従わないで、次の三つに整理して述べる。

Ⅰ センテンスの組み立て

Ⅱ 単語の品定め

Ⅲ 構文の種類々相

Ⅳ 索引・品詞分類表

「日本語の姿を正しく知りたい」という一般の方の要望にこたえて、日本語の文法をたのしく、おもしろく、かんでふくめるように書いたのだと著者は言う。そして、この本に、著者は、

(1) 文法の分析のしかたのズジミチを示すことと並んで、

(2) その間に、日本語のいろいろの性格や、特色がつかめるように、

(3) あわせて、日常話したり書いたりする、言語生活の反省になるように、

というネライを盛つていると言う(はじめに)。

内容を、章名で示すと次の通りである。

序説 言語記号と文法

Ⅰ センテンスというもの

各章を、それぞれ数節に分け、さらに、適切な小見出しを多くつけている。そして、新鮮な用例、独特な比喩などを用い、時には、余談・脱線も敢えて辞せず、文字通り、たのしく、おもしろく説明しようと工夫している。

本書の叙述は、そのように平易で、親しみ

やすいものであるが、その内容(Ⅱとりあげている事項)は、従来の文法書で取り扱ってきた事項だけではない。従来の多くの文法書で説いてきた事項(橋本文法を中心とした、いわゆる学校文法で取り扱ってきた事項をふくむ)を、著者が、わかりやすく、説明しな部分の外に、著者自身の考えによつて、

- ① センテンスの分類
- ② 文節の分類
- ③ 品詞分類

右の中には、著者の既発表の論文と、その考えが同じものもある。しかし、既発表の論文そのままではなく、本書の組織に適合するように書き改めているので、既発表の論文と比べても興味深い。

一、センテンスの分類について

まず、著者の考えを、簡条書にまとめて示そう。まとめ方は、本書の語句そのままのものもあるが、叙述を要約したものもある。後者の場合は、※印をつけて区別する。

(1) われわれのコトバには、客体的表現(デイクトウム・D)と主体的表現(モドウス・M)とがあるが、この両者の合体すると

ころにセンテンスができあがる。すなわち、「客観的表現(D)」に、主体的表現(M)が加えられ、Mによつてしめくくられていゝ」という一まとまりがセンテンスである。ただし、Dが言いあらわされず、Mだけの場合もある。(p.49 p.50)

(2) しめくくりのMの違いによつて、二つに分ける。すなわち、述定のモドウスでしめくくられるほうが述定文、伝達のモドウスでしめくくられるほうが伝達文である。(p.48)

※(3) 文節は、センテンスを組成する単位であるとして(p.87)文節がセンテンスの中で持つている役割や関係に着目し、センテンスの中で一番主要なカナメの文節(「基幹要素」として、断正文節を取り出す。断正文節は、センテンス全体の統率者であるから、そのカナメの文節を分類することは、同時に、センテンスそのものを分類したことにもなるとする。そして、断正文節を、叙述性の有無によつて、述語と独立語の二つに分けさらに、次のように下位分類する(p.114)

I 〈叙述体〉のセンテンス＝述語で言い切るセンテンス

(a) 完全叙述体：二人は若い。

分化の有無  
内容の有無  
叙述性の有無

	M 文		D M 文		I 述定	II 伝達
	無分化		分 化			
	非叙述体		叙 述 体			
	無 叙 述	完 全 叙 述	不 完 全 叙 述	完 全 叙 述		
述 定 文	ア ラッ! オヤ?		雨の音? 雨の音!	夜が明けた。 夜が明けたらう。 夜が明けたか。 では出発しよう。	断定 推量 疑い	走れ! 動くな! 命令
伝 達 文	感動 疑い	ハイ! 呼びかけ 応答	えり子さん! 呼びかけ	断定 疑い		
	常に一文節		多文節あり	一文節		両方のばあ

(b) 不完全叙述体：空は青空。  
II 〈非叙述体〉のセンテンス＝独立語で言い切るセンテンス。

(a) 分化(展開)のあるもの：真知子さん!

(b) 無分化(無展開)のもの：オイ!  
最後に、(2)と(3)に述べた二つの分類を組み合わせて、前記のようなセンテンスの分類表を得る。(p.116)

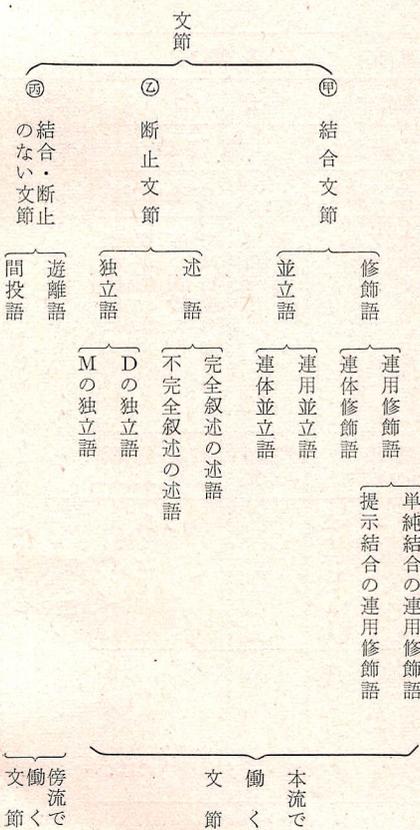
以上についての私の意見を述べる。(p.116)

(1) Mの違いによる分類と、断正文節の違いによる分類とを組み合わせ、センテンスの分類を示した点は、著者による新しい開拓であろう。しかし、断正文節だけがセンテンスの分類に直接参与して、他の結合文節は、センテンスづくりの本流に参与するといひながら(p.85)センテンスの分類では、考慮されていない。したがって、著者のセンテンスの分類では、たとえば、次のものは、同じグループとなる。

う。次のように改めては、不都合であろうか。

三、文節の分類について

著者の見解では、センテンスの構造の説明は、文節の分類と深く関連する。この見解は、文節という単位を認める文法論としては、当然のことであろう。しかし、従来の研究では、その点が、やや、不徹底であった。著者は、その点の解明に、一歩を進めている。文節の分類は、著者の新しい開拓であり、特に教えられる点が多い。



センテンスの中味、語られる内容そのもの」「傍流とは、センテンスの中味、語られる内容そのもの」に關係しないもの」(p.60, p.86) という意味のようである。仮に、本流、傍流を右のように解するならば、六一ページのように、本流のMの中に外郭のMがふくまれていないことは不都合である

本流のM 叙述のM::断定・推量・疑問・意志・感動::  
 命令・呼びかけ・応答...

中核のM 伝達のM::

外郭のM 文の途中のM  
 文末のM::感動・もちかけ

単純結合の連用修飾語  
提示結合の連用修飾語

- (2) DM文の中で、不完全叙述体の述定文(雨の音!断定)と、非叙述体の伝達文(えりこさん!呼びかけ)との区別は、何によつてなされるのが問題である。これを文節の分類で言うならば、不完全叙述の述語と、Dの独立語の区別は何によつてなされるのかということである(p.111) 不完全叙述の述語の場合は、従属する文節の中に提示結合の文節をとり得るが、Dの独立語の場合は、従属する文節の中に提示結合の文節をとり得ないという点を識別法に用いては不都合であろうか。
- (3) なお、センテンスの分類に關係するMの分類表(p.9)にも、問題点がある。  
 本書では、〈本流〉〈傍流〉という語がしばしば用いられ、品詞分類の規準にも用いている重要な概念のように思われる。明確な概念規定はないが、およそ、「本流とは、

- (イ) ふる。  
 (ロ) 雪がふる。  
 (ハ) 山にふる。  
 (ニ) 今日が雪がふる。  
 (ホ) 今日も雪がふる。  
 (ヘ) しかし今日は野に雪がふる。

Ⅱ センテンスの組み立て、Ⅳ 構文の種々相  
での著者の説明をもとに、著者の文節の分類  
を、私が、仮に表にまとめてみた。前頁の表  
がそれである。

文節は、センテンスを組成する単位である  
として、文節がセンテンスの中で持つている  
役割や関係を、貫して考えようとしている。

まず、㊸㊹は、役割の上からの区別であ  
る。すなわち、㊸は、「関係をたつける」とい  
う役割、㊹は、「関係をたちきる」という役  
割、㊺は、右の二つのどちらの役割をも持つ  
ていないということである。

#### ㊸ 「結合文節の下位分類」

まず、修飾語と並立語に区別する。

「文節Aが文節Bに結合するとは、AがB  
に従属することである。BがAを統率するこ  
とである」という(p.86)そこで、

「文節群(A+B)において、BがAを統  
率し、同時に(A+B)全体を代表する」と  
いう結合関係を作る場合のAを〈修飾語〉、  
Bを〈被修飾語〉と呼ぶ、p.93 p.94)また、  
「文節群(A+B)において、BがAを統  
率し、しかも、Bが(A+B)全体を代表し  
ない」という結合関係を作る場合のAを〈並

立語〉、Bを〈被並立語〉と呼ぶ、(p.102)。  
ここで、〈代表〉という概念は重要で、修飾  
語と、並立語とを区別するのに用いている。  
すなわち修飾語と並立語の違いは、結合した  
結果生じた、実質の意味の違いに関係すると  
いう。(p.93)

連用結合(ネクサス)と、連体結合(ジャ  
ンクション)との区別は、特に新しいもので  
はない。しかし、連用結合を、展開とし、連  
体結合を凝縮とする説明と(255)と、並立関係  
にも、連用結合と連体結合を認めて位置づけ  
た点とは注目される。

単純結合と、提示結合の区別は、係助詞の  
文法的機能に着目した区別である。従来の研究  
でつくられていたことで、特に著者による  
新しいつけ加えはない。

#### ㊹ 「断正文節の下位分類」

述語と独立語の区別は叙述性の有無によ  
る。断正文節の中で、叙述性のあるものが述  
語で(p.106)、叙述性のないものが独立語で  
ある(p.111)。叙述は、橋本博士のそれと同じ  
である。

〈述語〉を、完全叙述の述語と、不完全叙  
述の述語に下位区分する。不完全叙述とは、

「叙述作用がないのではないが、形がととの  
わなかつた」という。〈形がととのわない〉  
と〈省略がある〉とは、同じ意味か、違う意  
味か不明である。〈形のととのわないままの  
もの〉に、叙述性を認めるといっているのであ  
れば、体言に叙述性を認めることになる。表現  
されていない部分を予測して叙述性を認めよ  
うというのであれば、0 記号の叙述と似てく  
る。次の〈Dの独立語〉との識別如何という  
問題に派生する。この点は、先にセンテンス  
の分類の項でもふれた。

〈独立語〉は、〈Dの独立語〉と〈Mの独  
立語〉とに下位区分する。この識別法は明確  
である。この区別と位置づけは、著者による  
開拓であろう。

#### ㊺ 「結合・断止のない文節の下位分類」

〈遊離語〉と〈間投語〉とに区別する。  
〈遊離語〉は、ディクトウム(D)で、〈間  
投語〉は、モドウス(M)であることが区別  
のきめ手である。この区別と位置づけも著者  
による開拓であろう。ただ、立場は異なるが、  
森重敏氏に、文の特殊成分論の領域として、  
応答語、感動語、呼掛語、挿入句、呼掛句な  
どの考察があるのが思い出される。(日本文

〈遊離語〉の中の①列挙②同格③限定④補充⑤置きかえ⑥標示の六つの区別は、その遊離語が、他の部分との間に実質の意味の上で関係するときの関係のしかたによつて分けたものようである。ただ、〈置きかえ〉と、〈標示〉とは、検討の余地がある。つまり、〈置きかえ〉は、〈標示〉の一種であるとも考えられるからである。

ともあれ、以上の、著者の文節の分類には、著者による新しい開拓の部分が多い。したがつて、その結果から、一方では、センテンスの構造の説明、センテンスの分類への寄与を期待し、他方では、品詞分類への寄与を期待することができる。しかし、センテンスの分類への寄与は、先にふれたように不十分であると思う。もちろん、文節の分類と、センテンスの分類とは別であるという考え方も可能であろう。しかし、著者の場合は、本書の論述からみて、文節の分類と、センテンスの構造の説明・センテンスの分類とを、深く関連させようと意図していることが推察される。

四、品詞分類について

次に、著者の品詞分類を紹介する順序であ

る。与えられた紙数を越えるので遺憾ながらそれができない。次のことだけをつけ加える。

(1) 文節の分類の考え方が品詞分類に及んでいないこと。例えば、自立語・付属語の次の、下位分類の規準は、「本流」「傍流」を用いている。また、「本流」「傍流」の次の、下位分類の規準には、「結合力」「断止力」を用いている。

(2) 従来品の品詞分類とは、異なる結果がでてゐること。例えば、形容動詞・接続詞という名称がない。形容動詞は、形容詞の中に、包含し、「イ型」と「ダ型」と活用系列の違うものとしている。接続詞は、解消して、一部は、副詞へ入れて、承前副詞とし、他は、連体詞へくり入れて、並立連体詞としてゐる。

(3) 分類表にはあらわれていないが、用言の活用・助動詞の活用に新しい見解を示していること。

(東京堂 B6・三一〇ページ 四六〇円)

昭和三十七年六月五日印刷  
昭和三十七年六月十日発行

定価 百二十円

論究日本文学 第十八号

編集兼 立命館大学日本文学  
発行者 森 本 修

印刷所 京都市下京区七条  
御所ノ内町五〇

中 村 勝 治

発行所 京都市上京区河原町通  
広小路西入ル

立命館大学日本文学会

本会への入会申込・会費の払込はすべて左記へお願い致します。

入会金 五拾円

会費 一年四百円(四回分納も可)

京都市西陣局区内

河原町通広小路西入ル

立命館大学文学部内

立命館大学日本文学会

振替 京都三三八三番